

博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

令和3年度

京都外国語大学

はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を目的として、令和 4 年 3 月 15 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏名	吉野 孝介
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第26号
学位授与の日付	令和4年3月15日
学位授与の条件	本学学位規程第3条3号該当
学位論文題目	中国語の“一”及び「“一”を伴う数量表現」 の用い方の特徴に関する研究
論文審査委員	主査 教授 彭 飛 副査 教授 竹内 誠 副査 教授 張 黎（大阪産業大学）

論文内容の要旨

本博士論文は中国語の“一”及び「“一”を伴う数量表現」構文の用い方の特徴に関して、「翻訳研究／中日対照研究」「構文研究」「類義語研究」などの視点から多角的に分析し、考察したものである。中国語の“一”を伴う数量表現の用い方のメカニズムをめぐって、「三つのパターン」「五機能」「三分類」などを提示し、中国語の“一”を伴う数量表現の用い方に対応する日本語訳の特徴についても考察した。序章、終章を含め、全9章から構成されている。

中国語の“一”を伴う数量表現が日本語より多く用いられることは中国語の一大特徴と言える。なぜ中国語は“一”を伴う数量表現を使わないと文として成り立たないのかについて、また中国語の“一”を伴う数量表現の使われやすい場面や、どのような機能が働くのかについて、〈ステップ1〉、〈ステップ2〉、〈ステップ3〉の順序で、例文調査を中心に行った。

第1章では例文調査の〈ステップ1〉として、「日中対訳コーパス」における日本語原文『雪国』とその中国語訳から研究対象となる例文を抽出し、日本語から中国語に翻訳する際に付け加えた“一”を伴う数量表現を考察した。その結果として、パターン①「初登場(人物・事物)」を表す場合、パターン②「話者の評価」を表す場合、パターン③「程度・量」を表す場合に“一”を伴う数量表現という三つのパターンがよく用いられることを提示している。

第2章から第4章までは例文調査の〈ステップ2〉として「日中対訳コーパス」から日本語

原文『雪国』以外に、『ノルウェイの森』などの作品とそれらの中国語訳を中心に考察し、第1章の「三つのパターン」の論点を裏付ける資料とした。特に“买了一件衣服”“他是一个好人”のような【VP+“一”を伴う数量表現+NP】【NP₁+“是”+“一”を伴う数量表現+NP₂】などのパターンを中心に、「特定化機能」「焦点化機能」について考察した。

第5章と第6章は研究<ステップ3>として、日本語原作の中国語訳の調査だけでは限界があるため、幅広く中国語例文の調査に力を入れ、「一」を伴う数量表現」の特徴の全体像の解明に力点を置き、「三つのパターン」から展開し、「一」を伴う数量表現」にかかわる諸問題について考察した。「一」を伴う数量表現」の各パターン、機能、意味項目、使用有無の基準などについて詳細に分析した。

主語として用いられる【“一”を伴う数量表現+NP】における「一」を伴う数量表現」の使い方に関して、日本語では「ガ」、「連体修飾語」でNPが「初登場(人物・事物)」を表すのと同様、「初登場(人物・事物)」のNPを特定化するため、中国語では「一」を伴う数量表現」がよく用いられるという特徴を取り上げた。また【述語+目的語】構造における目的語が新しい情報として提示される構文において、「一」を伴う数量表現」を使用するか否かは「初登場のもの」と「会話の焦点」という二つの条件にかかわるだけでなく、VPとNPの関係(「動作行為の対象」「動作行為の生み出す結果」「動作行為の道具」「動作行為の場所や方位」「動作行為の主体」)にも関わると主張している。

【NP₁+“是”+“一”を伴う数量表現+(AP)+NP₂】構文として用いられる場合、「一」を伴う数量表現」は「話者の評価」「話者の判断」を表す。例文調査を通して、プラス評価、マイナス評価、ニュートラル感情を表すことが可能である。「一」を伴う数量表現」が「少量」「気軽さ」を表す場合は、日本語の「チョット」の表現によく類似している。「一」を伴う数量表現」が「大量」を指す場合は、量が多いだけでなく、場合によっては「すべて」、「全部」、さらに「広範囲にわたる」ことも表す。「給」を伴う二重目的語の構文における「一」を伴う表現」の場合、NP₂を新しい情報として提示する機能が働くと思われる。【“给”+NP₁+NP₂】と【“给”+NP₁+“一”を伴う数量表現+NP₂】の違いは「計数+情報提示」と「計数+情報提示+情報焦点」の違いであると指摘している。

存現文における【“在”+“一”を伴う表現】構文は、ある特定の場所や、ある時間を新しい情報として提示して、それがクローズアップされる機能が働くと指摘している。“当”“做”を伴う「一」を伴う数量表現」の場合は身分、職業を表す。また“成”を伴う「一」を伴う数量表現」の場合は、人／物事の特徴がクローズアップされるという機能が働くことが読み取れる。“一种”はどのような感情、態度、表情、手法、印象、雰囲気なのかを表し、話者の心の持ち方を表す場合が多い。また、“用”“以”“露出”“表现”などを伴う「一」を伴う数量表現」の場合、後文の目的語が焦点化されるという機能が働くと指摘している。

口述試問

本博士論文の目玉は中国語の“一”及び“一”を伴う数量表現」構文の用い方のメカニズムを解析するため、①「計数機能」、②「形象化機能」、③「範疇化機能」、④「焦点化機能」、⑤「特定化機能」、という「五機能」説を提示している点である。各章ではとりわけ④「焦点化機能」、⑤「特定化機能」を中心に考察した。また BCC コーパス及び例文調査によって、①【計数】類、②【弱計数+ α 】類、③【計数+ α 】類という「三分類」説を提示している。【計数】類は「五機能」の「計数機能」に当たる。【弱計数+ α 】類は「五機能」の「特定化機能」と「焦点化機能」の二つに当てはまる。【計数+ α 】類は「五機能」の「計数機能+特定化機能」と「計数機能+焦点化機能」に相当するものだと分析している。さらに第6章第4節では「五機能」「三分類」の視点から古代中国語由来の“一”を伴う四字熟語」を中心に考察した。現代中国語に見られる“一”を伴う数量表現」の用い方の特徴は古代中国語でも確認できたと力説している。

口述試問の際、主査・副査より様々な見地から質問されたが、論文提出者は長年の研究の蓄積を遺憾なく発揮し、ほぼ的確な回答を示し、かつ興味深い議論も展開した。

ただし、本論文に問題点がないわけではない。一部の考察にはやや脆弱な面も見られる。今後、とくに史的考証などの研究が期待される。【文献資料の扱いについて若干問題がある】、【<一+名量詞>か<一+動量詞>か研究範囲をはっきりさせるべきでは】【一部の定義をはっきりさせるべきでは】などの意見もあったが、今後の課題として研究の進捗が期待される。

これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してない。本研究は中国語の“一”及び“一”を伴う数量表現」構文における研究の最前線でなされたものであり、研究テーマが絞り込まれており、研究の方法論が明確である。先行研究に関する調査も十分に行われ、その知見も踏まえている。例文調査や情報収集の能力と分析能力の上、オリジナル性が高く、考察も詳細で、理論構築もしっかりできており、高い評価に値するものであることに変わりはない。

審査結果

本論文は研究の新規性、オリジナル性が認められ、結論にいたる議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的であると評価される。本研究は中国語教育にも、日本語と中国語の対照研究にも貢献できるものと評価する。

本審査委員会は、全員一致で、申請者に対して博士(言語文化学)の学位に値するとの結論に達した。